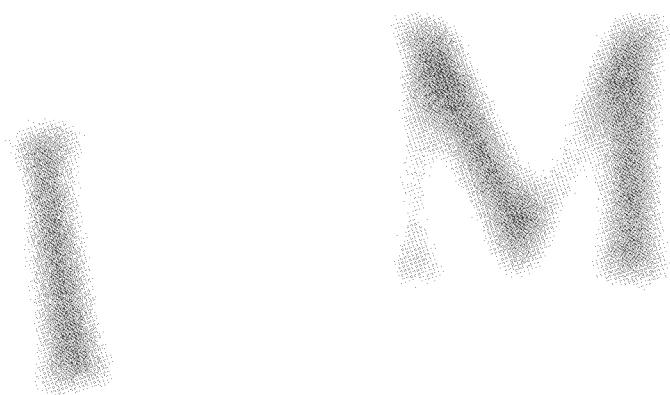
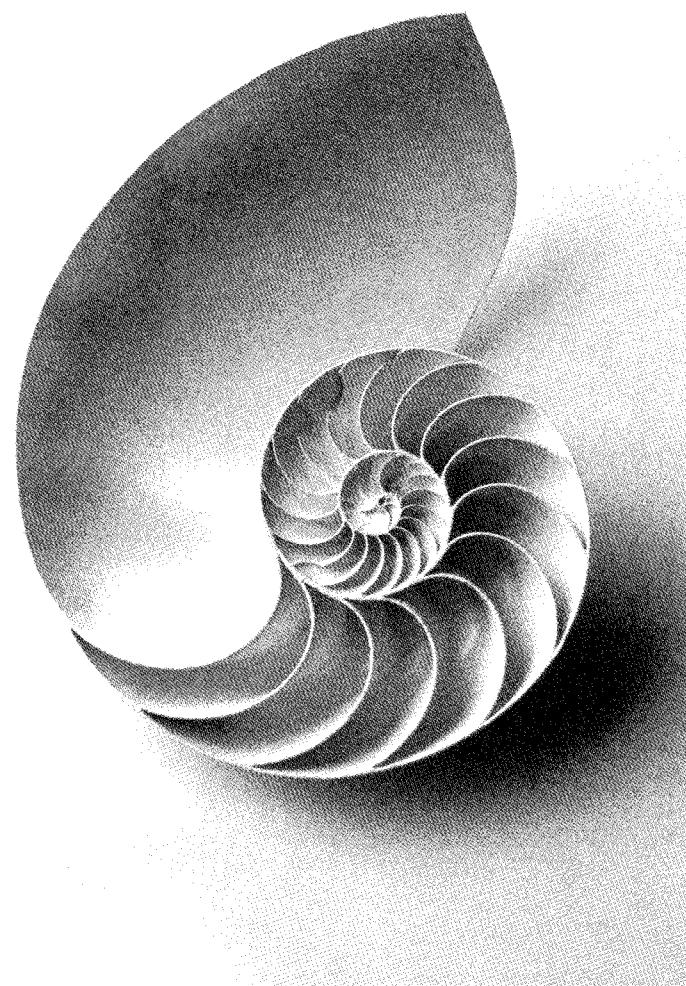


第7回

文窓賞優秀作品集



2013年10月発行

文窓会
神戸大学文学部同窓会

優秀賞

過去を振り返って、そして大学生活への抱負

文学部人文学科一回生 伊石 昂平

2013年1月、僕は切羽詰まっていた。むろん僕だけではない、この国の受験生という肩書を持つ人々は、おそらく大抵は僕と同じだっただろう。僕は今、神戸大学文学部の学生になった。ということは、間違いなく合格したのである。

ほんの4～5ヶ月ほど前、いや、正確には僕は後期入学なので、ほんの3か月ほど前になるが、本当に辛かった。この一文だけだと、単に受験勉強が辛かったのか、と思われるが、僕の場合には他にも悩みの種があった。

僕は音楽好きの母の勧めで、4歳からチェロという弦楽器を習っている。幼少期のころからチェロの練習は僕の日課であり、チェロを触らない日はほとんど毎日を過ごしてきた。そんなわけで、チェロとはかれこれ14年の付き合いになる。僕にとってチェロは家族というか、むしろ僕の分身と言っても過言ではない。ゆえにこれからはチェロを「彼」と呼ぶことにする。

初めて彼と出会ったとき、僕は身長がまだ100センチほどだった。今思い返すと、彼も「君はヴァイオリンか?」と思うぐらい小さかった。そんなころから付き合いが始まったわけだが、彼はなかなかのしたたか者だった。すんなり僕の言うことをきかない。幼児のくせにしわがれた老人のような声を出して、僕を怒らせてばかりだった。挙句の果てに、僕は堪忍袋の尾が切れて、彼の腕(弓)を2回も折ってしまった過去がある。俗に言う兄弟げんかというものだが、無抵抗の彼に暴力をふるった僕は圧倒的に不利だ。その時は母に酷く叱られて、散々な目にあった。

小学生のころも喧嘩は絶えなかった。僕がどん

なに頑張っても、彼は渾みのある声しか出してくれないからである。見るに見かねた母が、一度だけ無理やり絶交させたことがあった。彼を納戸に閉じ込めたのである。さすがに数日は静かな日々だった。だが、日に日に空虚感というか、彼がいない静けさに耐えられなくなっていた。そしてとうとう我慢できなくなり、「やっぱり一緒にいたいから、もう一度チャンスをちょうだい。」と母に懇願して彼を納戸から救出した。それからは、紆余曲折あるものの、ずっと付き合っている。

小学校高学年になると、お互い次第に成長し、喧嘩はしなくなった。僕は彼の性格をわかってきたし、彼も僕を理解してくれて、なかなか良い声を出すようになった。そうなると、もう楽しくてしかたがない、僕らの付き合いはより深くなっていた。

ところが僕らの関係に距離ができる事態が発生してしまった。僕が中学に入学してからのことである。小学生の頃は彼と好きなだけ遊べた。しかし中学というところは勉強をしなくてはならないのである。毎日の課題、定期テスト・・・今までの自由な時間が圧倒的に少くなり、彼と会話する時間を取り難い日も出てきた。そして僕の人生は揺れに揺れまくるのである。

ここから先は、見方をかえると、一種の恋愛小説となるかもしれない。むろん、僕の人生にそのような現象は未だ起こっていないので、何とも言えないが・・・

僕は「勉強」と「彼」の狭間でずっと悩んできた。そして今も悩み続けている。

僕の性格上、俗に言う「両立」というものはできないのである。恋愛に置き換えると、「ふたまた」

と言うのであろうか、いや、それは不適切な言い方だが、要するに、極めて不器用な性格で、上手く立ちまわる事が大の苦手である。さらに凝り性という性格も災いし、片方に集中すると片方は冬眠状態になってしまう。そんなことをうろうろと繰り返しながら中学生活を送っていたが、これではあまりにもどちらも中途半端である。「二兎を追う者は一兎も得ず。」まさにこれに尽きる。おかげで僕は彼と挑んだコンクールで悔しい結果を招いてしまった。勉強をとるか、「彼」との会話、すなわち芸術をとるか・・・いよいよ決断の時が来た。

ここからは「彼」という比喩表現はしばし小休止にして、真面目に僕の思いを書き連ねたい。

到達点をどこに設定するかにもよるが、学問と音楽を両立させることは極めて難しい。どちらもほどほどで良いなら可能であるが、どちらも高い目標を持つと不可能に近くなってしまう。天才ならそれも可能だろうが、残念ながら僕は至って凡人である。それも相当不器用な部類の。そのくせ目標はやたらと高く設定しているところが余計に厄介だ。

そもそも学問と音楽のどちらも学習する場合、両立という言葉を使って表現すること自体が、全く別個のものという証拠である。高校生までに修得する内容であれば、努力すれば教育課程の中で十分習得していくが、音楽の楽器演奏に関しては教育課程以外に個別に時間を割く必要があり、そして技術習得までに膨大な時間と努力が必要になる。仮に音楽を選択した場合、教育課程と並行してその膨大な時間を捻出しなくてはならない。同じことはスポーツなどにも言えるのだが、とにかく、学校で習えないことをするためには、しない時よりも何倍もの時間と努力が必要なのである。

僕は迷い続けていた。音楽がしたい、しかし勉強も未知なことが次々に現れ、興味は絶えない。こういう迷った時というのは身近な環境も大いに影響する。僕は学生だから当然学校で集団生活を送っているわけで、その集団の中にいると勉強

以外の道に進むことは異質なのである。皆が勉強をする中で僕はその方向に押し流されていった。そして中学生での決断を先送りにし、両立可能な高校へと進学した。

ここでまず、音楽の道を考える人が必ずや悩む事を紹介したい。一言で言うならば、「食べていけるのか」である。誰しも趣味と実益を兼ねた人生を歩みたいし、それが最も理想な形である。しかし音楽家は好きなことができて幸福だが、実益が伴わないのが常である。しかも経費が非常にかかる。そうなると、誰しも悩むのである。そして中には家族に反対される場合もある。結果、やむなく学業で進学する例は非常に多い。つまり、学問以外のことを選択する場合、将来のことも踏まえたうえで相当たる強い意思が必要になるのである。

さて、ここからは「彼」との話に戻る。高校に上がった僕は、受験の為にしばらく距離を置いていた「彼」と再会した。彼はケースの中で静かに寝ていて、その姿はミイラそのものだった。とにかく恐る恐る起こして声を聞いてみた。想像通り濁んだ声だった。「やはりそうか、申し訳ない、ごめん。」僕は何時間も、昔懐かしい会話を思い出しながら語りかけた。そうすると、彼は少しづつ美しい声を取り戻してくれた。とは言え一方的に距離を置いたのは僕だから、すぐに「蘇った」とまではいかないが、数日するとお互い満足できる程度に会話を楽しめるようになった。

高校生活は僕の想像以上に忙しいものだった。入学早々から大学受験に向けてアクセル全開なのだ。僕は「彼」になかなか会いに行けなくなってしまったので、そっくりの別人に会うことにした。弦楽クラブに入ったのである。今考えると、これは僕にとってとても貴重な財産になった。それまでには「彼」と二人だけの会話だったが、ここにはタイプの違う友達が大勢いる。さすがに大勢いるとあちこちで勝手に喋り出すから、なかなか話がまとまらない。だがそれも楽しいものだった。

実は高校入学の時点で僕はもう進路を決めていた。とにかく学校で習えることをしっかり習得しよう。そう思っていた。彼とは学校で知り合ったわけではない。あくまでも個人的に知り合ったのだ。それならば、これから先もずっと上手くいけば一生関係を続けていくことができる。しかし、学校は通う期間が限られている。習える時間も少ないのだ。それならば学習しよう、そう思っていた。

こうして僕は、高校入学時点で芸術大学ではなく普通大学に進路を決め、勉強に精を出すことになった。

僕は彼と距離をおき、皆と同じように勉強とクラブに精を出して高校生活を送っていた。

だが、離れると存在価値に気付く、ということは良くあることだ。子供のころに絶交した時と同じ現象が高校でも起こったのだ。高2の春、僕は無性に彼に会いたくなつた。このままでは勉強に集中できない。そう思った僕は、高3までの1年間、彼の元に戻ることにした。そして、中学の時、両立に苦しんで悔しい思いをしたコンクールを今度こそ二人で制覇する。そう決めていた。本格的な復活は約2年ぶり。昔の感覚を取り戻そうと必死にやつた。その過程は厳しいものだったが、彼は応えてくれた。そして1年後、僕は1位になった。それからはまた彼と距離を置き、受験勉強にいそしんだ。

僕は昔から社会科の授業が好きだった。特に地理や歴史は知れば知るほど奥が深くて面白い。そして、他のどの教科よりも、将来社会人としての知識や国際的視野を広げることができる。また、西洋の歴史は音楽とのかかわりも深いのでなおさら好きだった。

のんびりと高校生活を送ってしまった僕は、高校3年の夏、ちょうど一年前の今頃、かなり焦っていた。急いで巻き返しにかかったけれどなかなか前に進まず、受験本番が近づくにつれ、半端じやないぐらい焦ってしまって、返ってはかどらない状態に陥ってしまった。まさに八方塞がりの状態で

ある。

こういう時こそ心のゆとりがほしい。僕の場合それは音楽にあるけれど、この危機的状況の中、悠長に彼と遊ぶ暇なんてあるはずがない。とにかく僕の脳細胞を全て活動させて、何とか受験を乗り切った。

学問と芸術、本来その二つは表裏一体であると思う。それは僕が今ここにいるからわかったことである。学問だけでも芸術だけでも、片方だけを極めることはできないと思う。あらゆる知識がベースになければ、まず発想が貧弱になる。そしてそこから生れるものはたかが知れているのである。

僕は神戸大学で頑張ろうと思う。僕は偏った知識しか持たない人にはなりたくない。幸いにも僕の興味のある学部に入学したのだから、もっと幅広い教養を身につけたい。そしてそれを音楽にも活用したい。さらには国際的な視野を持って、広く将来の役に立てたい、そう思っている。文学部はスキルが低いなどと言う人がいるが、決してそうではない。これほど社会に密接した分野はないのである。神戸と言う国際的な街にあり、自然あふれる素晴らしい環境の神戸大学で、僕はさらに飛躍したい。

優秀賞

東南アジア、汗まみれ。

国文学専修三回生 酒井 友樹

序章

グローバル社会と言われて久しい。企業活動は地球規模化し、就職活動では高い英語力が求められるようになった。しかし、大学3年になる私は、就職活動が少し先に見え隠れするなかで、グローバル化の実感もなければ、なぜ日本人がせっせと英語を勉強する必要があるのかも分からなかった。

そんなある日、ひょんなことで友人から海外旅行に誘われた。行き先をタイだと聞かされ、それまで国外への渡航経験がなかった私はやや躊躇した。近年の大学生は内向き志向だと揶揄されるが、私も多分に漏れずだったのだ。しかし、海外に行けば価値観が変わるとも聞く。自分の将来への過剰な期待と不安によって、大学生活に迷いと行き詰まりを感じていた私は、この閉塞感を断ち切ろうとその提案に乗ったのだった。

そしてまずタイを旅行し、それがきっかけで更にベトナム、カンボジアをインターンシップで訪れた。途中、ベトナムではトラブルもあった。本稿では私の経験と、そこから学んだことを述べたい。

1. タイ

暑さと湿気で私の頭は朦朧としていた。街並みがぼんやり歪んで見えるのは、遠のく意識のせいか、はたまた逃げ水のせいか。旅費が安いという、ただそれだけの理由で、昨年末、私は友人と二人、バンコク市内を彷徨っていた。師走の日本列島とは打って変わっての、目玉焼きが焼けそうな熱さに、平生から虚弱な私は足元もおぼつかない。歩道の上には、ひしめくように立ち並ぶ露店。そこに売られるスープと思しき液体から漂う、一種独特的の香りが気分を悪くさせた。

そんな私の目に、一人の少年の姿が映った。四車線道路の真ん中に、小学生ほどの男の子が立っているではないか。大都市バンコクの道路は、トukトukと呼ばれる三輪車や、4人乗りは当たり前のバイク、なぜかピンク色をしたタクシーなどでカオス状態である。男の子はモップとバケツを手に、車列を縫ってぐんぐん歩いていく。ほどなく彼は、信号を待つ高級そうな外車の前に立ち止まる。そのフロントガラスをおもむろに磨きだした。そして、一通り仕事を終えると、運転席の白人男性と何やら交渉し始めた。どうやら、チップを要求しているようだ。暫くやり取りをしていたが、失敗に終わってしまったらしい。少年はまた、とぼとぼと歩きだした。彼は日本の同世代の子供が絶対にしないであろう、油断のない鋭い目をしていた。

スラムに住む貧困層の子供たちはこうして、停まった自動車を勝手に洗って、チップを稼ぐそうだ。私は暑さも忘れて、その一部始終を歩道から見ていた。日本では目にする事のない光景に、少なからずのショックを受けた。一方で、今やバンコク市内には巨大ショッピングモールや高級ホテルが乱立し、地下鉄やモノレールもある。世間知らずの若造が、世界は平等でないと実感した瞬間である。友人は大した反応を示さなかったが、しかし、私はやり場のない憤りを覚えた。その後、有難い仏教寺院へ行こうが、かの有名なニューハーフ・ショーヘ行こうが、あの男の子の姿が脳裏に焼き付いて離れない。だからと言って、自分にできる事が簡単に思いつくわけでもなかった。また、これまで何も知らなかった自分に腹が立った。こうして、心にわだかまりを抱えたまま、真っ赤になつた肌で私は真冬の日本に戻った。

2. ベトナム

帰国後、大学構内で偶然気になるポスターを見つけた。内容はベトナムとカンボジアでのインターンシップについてのもの。JAPFという団体が主催しており、春休み中の12日間で、孤児院や学校でのボランティア活動、施設見学など、多くの経験が得られるとのこと。カンボジアの領事館と観光省が後援しているそうだから、怪しげな団体ではないようだ。私はその貼り紙を前にして、自分にも出来ることがあるかもしれない奮い立った。健康面に一抹の不安が残ったものの、一晩考えた末、意を決して申し込んだのだった。

そして2月末、気づけば私はホーチミン市にあるベトナム空港に、参加者の大学生約20人、そして学生スタッフと共に降り立っていた。空港から一歩外に出ると、やたらとバイクの多いホーチミン市は活気と喧騒に満ちていた。ねつとり体にまとわりつく湿気がまるで蒸し風呂である。あれよという間にTシャツに汗で不格好な世界地図ができるので、まずは市場で衣類を調達することにした。

訪れたベンタイン市場には、天井の高い巨大な堂の中に、數量の個人商店がぎっしり店を構えていた。これでもかと堆く積まれた日用品や食料品が、今にも崩れ落ちそうだ。ちなみに、東南アジアの市場や露店の買い物では、価格を交渉するのが一般的である。私も挑戦してみたものの、最初は店員に上手いようにあしらわれ、Tシャツ1枚を10ドルで買わされてしまった。だが、相場を考えるとこんなに高いわけがない。日本人と見られ、高めの値段をふっかけられていたわけだ。とは言え、舐められてばかりではいられない。横柄な態度くらいが丁度良いと悟った。相場より安い価格から交渉を始めるのがコツである。私は次第に交渉術を身につけていき、最終的にはTシャツを3ドルほどで買えるようになった。

これらのやりとりは簡単な英語であり、時には日常会話程度の日本語も通じる。実は東南アジアの人々の方が、総じて日本人より外国語が話せる。それは、海外からの観光客を相手に商売をする

ことが多く、外国語が生活と直結するからだろう。私はゲームのような値切り交渉に魅了されつつも、彼らの語学力に驚かされるのだった。

しかし順調と思えたのも束の間、私の体に問題が発生する。深夜、ホーチミン市のホテルに着いた途端、私は鋭い胸の痛みを感じた。私はすぐさま過去に患った肺気胸の再発を疑った。そこで急遽、学生スタッフの方に同行してもらい、タクシーで病院へ向かうことになった。

なんとか10分ほど離れた病院に到着した私は、言葉の壁という新たな問題にぶち当たることになった。その診療所にはベトナム人の医師しかおらず、英語でやり取りするほかなかったのだ。受験以来まともに英語に触れていなかった私は、さらに顔が蒼ざめた。自分の症状を拙い英語で説明するも、なかなか伝わらない。また、医者も耳慣れない発音の英語で、早口にペラペラ喋るので、いよいよコミュニケーションが成立しない。

原因がはっきりしないため、様々な検査が行われた。午前3時をまわるにも関わらず、レントゲン技師の方が駆けつけてくださった。私が申し訳ないと詫びると、“It's my duty”(これが私の職務です)、と言ってくれた。私にはその気の良さそうな小柄なおじさんが、とびきり格好良く見えた。

他にもあらゆる検査を行い、明け方になって漸く分かったのは、心臓に水が溜まっていたということだった。風邪をこじらせていたらしい。ドクターストップがかかり、数日間の休養を命じられた。その日の午後、一行はカンボジアへ移動する予定となっていたため、私だけベトナムに居残る事となった。

別行動となった私は、周りに日本人のいない状況に置かれてしまった。不安でたまらなかつたが、診療所の人たちが親切に助けてくれた。人の役に立とうと思って参加したインターンだったはずが、結果、人の世話になってしまふとは。いつも大事な場面で体がついてこない自分の限界に嫌気がさした。また、自分の語学力の低さも痛感していた。私はこの件で、「生きるための英語」の必要性を実感した。病気になった時、自分の症状を説明できなければ、命取りになるのだ。

体力も語学力もない自分が、あまりに情けなくなってきた、ぽろぽろ涙がこぼれた。自分で勝手にやって来て、勝手に挫折しているのだから世話はない。異国の中ベッドに横たわりながら、滲む天井を見上げて過ごすしかなかった。

2日後、幸いにも痛みが和らぎ回復した。医師には日本へ帰国するという選択肢も勧められた。しかし、ここまで来て引き返したくなかった私は、異常がないのならば旅を続けたいと伝え、許可を得た。病院の人たちは笑顔で送り出してくれた。沢山の人の支えで旅を再開出来たのだった。

私はベトナムからカンボジアへと移動することになった。ベトナム空港までは現地の方にバイクに乗せてもらったが、そのスリルは今でも忘れられない。無理矢理キャリーバッグを抱えての二人乗りなので、信じられないほどにバランスが悪いのだ。それに加えて、こちらでは誰も彼も運転が荒い。私は再び命の危機を感じながら、振り落とされないよう必死でバイクにしがみ付いた。

3. カンボジア

1時間のフライトの後、カンボジアのシェムリアップ空港に降り立って愕然とした。空港周辺に全くと言っていいほど建物がないのだ。ただただ広がる荒野に、痩せた牛がのそのそ歩いているだけであった。私は生まれて初めて地平線というものを見た。まばらにある民家も、掘建て小屋に裸電球があるだけの簡素な造りである。がたがたの道路をスタッフの方に車で送ってもらい合流した。

私は残り7日間の活動を通して、頭から湯気が出そうな陽射しにくらくらしながら、カンボジアについて学んでいった。驚いたことに、国民の半数以上は1日2ドル未満の収入で暮らしている。ゴミの集積場には資源ゴミを拾うことで生計を立てている人々もいた。それだけでなく、HIVやドラッグ、孤児や人身売買など様々な社会問題があり、水道、電気、ガスのインフラも十分には整っていない。内戦と虐殺の歴史が未だに影を落としていた。

忘れられないのが、子供たちが絵葉書や衣服を売る姿だ。バスを降りる度に、売り子たちが何

人も私に群がって来る。片言の英語を叫びながら悲壮な表情で迫ってくるので、心が痛んだ。誰もが華奢な体つきで、真っ黒に日焼けしていた。私は初めのうち、そういう子供たちから物を買っていった。自分が欲しくて買った物もあったが、気の毒な気持ちから買った物の方が多い。しかし、1人から買うと、また1人と次々に集まって来るのでは限界がない。周囲を取り巻かれて歩けなくなってしまい、結局、相手をするのは諦めてしまった。どうすべきかわからず、私は途方に暮れた。

ただ、興味深かったのは、私がその子たちにカメラを向けると、にこやかな笑顔で映ってくれたことだった。また、子供同士で遊んでいる時は、自然にはしゃいでいる。普段から、もっと卑屈な表情を浮かべているのか想像していたので、意外だった。よく観察していると、実は彼らの側から、哀れな貧しい子供を演じている部分がある。同情を引いた方がよく物が売れるからだ。彼らを「可哀そう」にしているのは、私たちの眼差しや行動なのかもしれないと思った。

カンボジアでは経済的な理由から、学校教育を受けられない子供が多い。子供たちはこうして観光地などで売り子や物乞いをさせられたり、農作業に従事させられたりしている。また、そもそも学校や教員が不足しているという原因もある。教育の支援が重要だ。

そこで、私たちはプノンペンの日本語学校で、日本語と日本文化について授業をさせていただいた。世界遺産アンコールワットなどの観光に力を入れるカンボジアでは、日本人観光客のためのガイドになろうと、日本語を学ぶ若者が多いのだ。

私は『源氏物語』についての授業をした。日本語学校なので、世界的に有名な「ゲンジ」なら、ある程度は知っているだろうと油断していた。ところが、生徒の方は名前すら聞いた事がないと言う。その瞬間、日本人の言う「世界的」は、欧米を指しているのだと悟ったが、そんな事を考えてみても仕方がない。予想外の反応に狼狽えつつも、ストーリーを語るが、それでもピンとこない様子である。そもそも天皇や一夫多妻といった文化や時代背景が分からなかっためだと、やっとそこで思い

至った。それではと、平安時代の様子から説明するが、「ニッポンでは今も牛車で移動するノデスカ」などと尋ねられる始末。物語の内容を語るという本題には辿り着けず、これでは何の授業だか分からぬ。自文化を海外へ発信する難しさが身に染みた。

授業は惨憺たるものだったが、彼らの意欲には感嘆させられた。私のたどたどしい説明にまで、一言も聞き漏らすまいと全力で耳を傾けてくれる。そのうえ、椅子も机もない教室に、ぎゅうぎゅうに押し込められているのに、しっかりノートを取っている。これほど好奇心一杯の眼差しで、真剣に授業を受ける生徒を私は見た事がなかった。彼らには勉強ができる時間が、貴重だという認識があるのだ。

貢がいくらあっても足りないので割愛するが、カンボジアでは他にも数えきれない出会いがあった。振り返ってみれば、社会問題を学びながら活動したはずが、不思議と人々の笑顔ばかりが思い浮かぶ。人と人の繋がりが濃く、昭和の日本を彷彿とさせる風景が残っていた。赤の他人の私にも、目が合えば手を振ってくれる人がいる。今日の日本のような生活ではなくとも、陽気に暮らす人たちと沢山出会い、豊かさとは何なのかとつくづく考えさせられた。

カンボジアの何もかもが貧しいわけではないのだ。日本の生活様式と違うからと言って、それが貧しいということにはならない。簡素な家だと思っていた高床式の木造住宅は、蒸し暑い風土に合わせたものだった。水道の普及率が低いのも、かつてはヤシの実からとれる果汁で水分補給できたからだった。カンボジアを漠然と貧しいと思っていた私の価値尺度こそが貧しかったと反省した。

終章

この短くも濃密なインターンを終え、私は帰国した。3月上旬の日本の風はまだひやりと冷たく、黒く焼けた肌に鳥肌が立った。関西空港からの帰り道、バスに乗って流れる風景を見ていると、これまで当たり前だった日本の姿が、また違って見える。きれいに舗装された道路、立ち並ぶ高層ビ

ル、人々の沈んだ表情。あらゆる物が新鮮に目に映った。カンボジアでのこぼこした道や雄大な地平線、そして子供たちの笑顔を恋しく思った。

思い返せば、このインターンは挫折の連続だった。出発する前、私は発展途上国を支援するのだと意気込んでいた。しかし、それはどこか相手を見下した傲慢な態度だった。実際はベトナムの病院をはじめ、逆に助けられてばかりだった。私の先走った思いは、独りよがりでしかなかった。上から目線で教育支援だと言ってみても、現地で出会った人々は皆、私などより英語が喋れた。何かをしてあげようなんておこがましい。私たちは対等な関係で協力するべきなのだ。

私が出会った子供たちは、今頃どうしているだろう。今日もうだるような暑さの中で、汗まみれになって働いているのだろうかと、今でもふと思う。

私はこの3か国の旅を通じ、懸命に生きる子供たちの姿を見て、まずすべきことがあると思った。それは、彼らを哀れみや偏見の目で見るのはなく、尊敬するということだ。どれほど理不尽に見える環境でも、彼らはたくましく生きていた。決して恵まれていなくとも、明るい未来が見えなくとも、それでも生き抜くのだという強い意志があった。

その後も日本でカンボジアなどから来た留学生と関わるが、やはり彼らの真摯な態度には目を見張る。日本語が上手で礼儀正しく、英語も達者だ。東南アジアの人々は置かれた環境の中で、真面目に努力している。

一方、環境が整っているにも関わらず、勉学意欲の乏しかったこれまでの自分の姿を思い出すと、恥ずかしさがこみあげてきた。私は所謂「発展途上国」の現状を見て、むしろ自分自身に対して憂いと危機感を抱いた。日本の経済的な豊かさに甘えて、その上に胡坐を搔いていたことに気がついたのだ。謙虚さを失っていた。

現代は変化が激しく、厳しい時代だと言われる。いま私にできるのは、与えられた状況を受け入れ、そのなかで最善を尽くすことだけだ。この一種の諦めと覚悟をもって、汗まみれになりながら、私はこの時代を生き抜かなければならないと思う。

佳 作

私の教育実習

英米文学専修四回生 河内 茉那

私は、教育実習初日の放課後プールにいた。中学校の時水泳部だったこともあり、部活動の見学に来ていたのだ。顧問の先生は不在だった。私は一旦所用でプールを離れ5分ほどして戻ると、一人の女子生徒が泣いていた。

「先生!○○君が泣かせました!」

「○○君が、女の子にクズって言ったんです。」

次々に周りの生徒から説明される。泣いた生徒も、泣かせた生徒もどちらも中学1年生だった。

「ほんとあんたって最低!」

「ありえない。」

「もう少し人の気持ち考えて発言できないの?」

私への状況説明が終わると、周りの先輩生徒たちは当事者の男子生徒を責め始めた。男女6人ほどから囲まれ自分の非を責め立てられ、耐えきれなくなった男子生徒は泣き始めてしまった。

「なんであんたが泣くの?」

「あんたが悪いんじゃないの?」

それを見て周りはさらに白熱する。

「泣いてない。」

涙を手でぬぐいながら、男子生徒は否定する。

この時、私はこの展開は良くないと思った。そう思うと、周りの非難を遮り、

「大丈夫。大丈夫だから。」

と男子生徒に言っていた。

「大丈夫だから、謝ろう。」

男子生徒は素直に謝り、なんとか和解が成立した。これが、私の教育実習の幕開けだった。

私は、母校である山口県宇部市にある公立中学校に3週間の実習へ行った。私の担当は、中学1年生の英語だった。実習が始まる前、私は不安と期待が入り混じった複雑な気持ちだった。以前実習へ行った経験者からは、教育実習はとても楽しいが、授業準備が忙しくて大変だと聞いていたからだ。私はその体験談を踏まえ、教育

実習を有意義なものにするため、始まる前に実習中の目標を設定した。目標は、「自分のことで手いっぱいにならずに、生徒との交流を大事にする。」だった。

しかし、教育実習が始まり1週間が過ぎても、私は思うように生徒とコミュニケーションがとれていなかった。生徒が私に話しかけてくれるだろうと期待し、積極性に欠けていたからだ。声をかけたかったが、どんな話題を持ちかけたらいいかわからなかった。担任の先生のスタイルを手本にしようと観察したが、先生は特に話題提供をがんばっていらっしゃる風ではなかった。なるほど、生徒の会話に自然に入ればいいのかと納得した私は生徒が話し出すのを待った。給食時間は生徒と向き合って一緒に食べるため、絶好の会話のチャンスだった。しかし、いくら待っても生徒は話し始めず、私の周りだけ妙に静まり返って黙々と食事をして、給食時間は終了するのだった。その時、私と担任の先生の一体何が違うのか解せなかった。しかし、今考えるとそれは信頼関係だったようだ。生徒も緊張していて少しかしこまっていたのだろう。そして、私に対して警戒心というのは大きさだが、まだ心を開いていない状態だった。日が経つにつれ、徐々に私と打ち解けていくのがわかった。授業を通しての関わり合いや普段の生活で、私が彼らに向き合おうと続けた結果だった。3週目には、給食時間の会話が弾み、私が給食を時間内に食べ終わることができないという事態が発生したほどだった。教師はなるべく早く食べ終わり、生徒のことを見渡せる状態になっておくべきなので、これはこれで問題ではあるのだが。

私は、実習にも慣れ心に余裕ができると、よく生徒のことを観察するようになった。昼休みに教室にいると、二人の男子生徒のことが気になつた。一人は、顔にタオルを巻きつけ視界を閉ざし、席に座ってじつとしていた。もう一人は、後ろの黒

板にひたすら絵とも呼べないただのぐちゃぐちゃの渦を、つまらなそうに書いていた。教室の外は、他の生徒の笑い声でうるさかった。私は、胸が苦しくなった。二人とも、本来楽しいはずの休み時間が過ぎ去るのを必死に耐えて待っているようだった。

この時、私の関わることのできる教育の限界を知った気がした。私は、教育実習生として関わる期間の短さと与えられる影響力の小ささに絶望した。私は、たったの3週間しかいない。私が例えこの生徒の心を開いたとしても、私がいなくなればこの子たちは支えを失うのではないか。そう考えたが、この胸の痛みを無視して、彼らと関わらずに終わることの方が嫌だった。私は、彼らと仲良くなる大作戦を決行した。

タオルを巻いていた生徒は、この夏手術することになるかもしれないと言った。それが不安で、友達にも辛く当っていた。そのため、友達は寄り付かなくなり、教室で一人長い昼休みの時間を退屈していたようだった。彼と話して、その不安が手に取るようにわかった。私は、ただひらすら彼の不安に同調した。心から彼を心配した。

ある日、その生徒が嬉しそうに私の元に寄ってきて言った。

「手術なくなった！」

それからの彼は、友人と楽しそうに休み時間過ごすようになった。

もう一人の落書きをしていた生徒の家庭の事情を聞いた。本人からではなく、別のクラスメイトからだ。その生徒の話では、彼と落書きの少年は以前いとこ同士だったが、今は違うということだった。つまり、親の離婚、再婚によって彼らの家族構成が変わったということらしかった。

「以前はよく遊んでいたのに、今はもうまったく話さないな。」

と、彼は言った。

「なんか気まずいし。」

私は、根気強く落書きをしていた生徒に話しかけた。最初は気まずそうに逃げられたが、徐々に会話をしてくれるようになった。最終日の前日、私はいつものように生徒の提出するデイリーライフを

読み、コメントを書いていた。それは、私に課された仕事の一つだった。生徒がデイリーライフに、その名の通りその日にあった出来事を記入し教師はそれに目を通す。落書き少年のデイリーライフにふと目がとまった。

「もうすぐ河内先生ともおわかれでとてもさみしいです。でも大学にいってもぼくたちのことをわすれないでください。」

それを読んだ時、とても嬉しかった。

私は、実習生という立場でも、彼らに何か残すことができたのではないかと思う。むしろ、実習生にしかできないことがあったのではないかと。私のできる教育に限界などなかった。今、3週間という期間を軽視して、彼らと関わることを制限しなくて良かったと思っている。最初から、生徒は私との関係を割り切ってはいなかったのだと思う。

これは、教育実習が終了した後のことである。私は、教育実習初日に生徒のけんかの仲裁をしたことを同じく教育実習に行き、今は塾の講師をしている友人に話した。すると、友人から「そこは教育者として、最初男子生徒を叱るべきだったんじゃない？」と言われた。私は、何よりも一対多の状態で孤立していた男子生徒を救うことを考え、「大丈夫」と声をかけた。私は、自分の言葉がけにより男子生徒は素直に謝り、事態は収束し、その後彼は私に心を開いてくれるようになったので、自身の言動に疑問を抱かなかった。しかし、友人からそれは教育者として正しい言動だったのかと指摘を受けたのだ。教育者という言葉が私に重くのしかかった。確かに、私は男子生徒にとって良い姉のような役割を果たしたかもしれないが、はたして教育者としてはどうだったのだろうか。そもそも教育者とは何なのか。教育者とは、一人の生徒を守ることよりも、全体の規律を重んじるべきなのか。教育者は毅然とした態度で、間違いを正すことに専念すべきなのか。私が男子生徒の言動を注意しなかったから、彼のクズと発言したことを肯定したことになってしまったのか。私は、教育者としてのるべき姿について考えた。そして、自分は教育者として正しかったのかわか

らなくなった。

実は、けんか仲裁のエピソードには続きがある。教育実習最終日だ。私は、あの時泣いていた女子生徒から手紙をもらった。手紙には、「部員とけんかした時、なだめて下さってありがとうございました。」と書いてあった。少なくとも彼女は、私のけんかの仲裁の仕方に不満を持っていないようだった。

私は、教育に絶対的な正解などないと思う。相手が変われば捉え方も様々で、一様にこういう時はこうすべきというマニュアルのようなものは存在し得ない。だからこそ、一人ひとりの生徒と向き合うことが大事なのだと思う。私は、女子生徒を泣かせてしまった男子生徒の気持ちを察し、周りの生徒の少し度が過ぎた一方的な集中攻撃も良くないと考え、間に割って入った。自分が正しければ、他人の気持ちを顧みずに大人数で責めることが許されると思ってほしくはなかったのだ。私の教育はまだまだ未熟で、現場での経験も乏しいので、自分が正しいと思ってしたこともそれがベストなのかはわからない。だから、こんな風に悩みながら、進んでいけばいいのではないかと思う。大切なことは、日々自分が変わる努力することなのではないか。人が変われば対応も違うし、時代背景が変わればまたいろいろ違ってくるだろう。私は、対応する生徒から学ばせてもらうつもりで接し、成長し続けていきたい。

教育実習で学んだこと。その中には、授業をつくりあげる上で気付きもたくさんあった。きちんと生徒に身につけてもらいたい内容を明確にした目的を持った授業づくりをすること。生徒の主体性を大事にするために、教師は生徒の自主性を促すサポート役に徹すべきこと。その中でも、授業を進める上で1番大事なのは生徒との信頼関係だと思った。生徒との対話を通して、生徒のことを理解した上で、生徒に合った授業づくりをすること。良い授業をつくるためにも、生徒と向き合うことの大切さに気付いた。私にとって教育実習での1番の学びは、人との関わり方だったように思う。個人個人と向き合うことが、こんなにも難し

いとは思わなかった。しかし、向き合った先には喜びがあった。これが、教師という仕事のやりがいなのだと思う。

私は、教師という仕事が好きだ。教えることが好きだ。子どもが好きだ。人と向き合っていくことが好きだ。そのことが再認識できたので、回り道をするかもしれないが、私は必ず教員になりたいと思う。

佳 作

教育実習を終えて

国文学専修四回生 齊賀 万智

蝉が慌ただしく鳴き始めた六月の終わり頃、すがすがしい達成感と温かい気持ちに包まれて、四週間にわたる私の教育実習は幕を閉じた。私の手には、生徒が描いてくれた色紙とクラス全員で撮った写真。やんちゃで、授業中あまり話を聞いてくれなかった生徒が恥ずかしそうに手渡してくれた。嬉しかった。この瞬間、教師という仕事の醍醐味を言葉では上手く表せないが、全身で感じることができた。実習が終盤に差し掛かった頃こそ、心地よい達成感と僅かながら教師としての自信を得ることができた私であったが、初めの頃は決してそのような確かな達成感や自信などは得られなかつた。その理由は何だったのだろうか。この問い合わせに対して一つ考えられる答えは、“自分が教師として子どもたちにどういうことを教えたいのか”という教師としての根幹部分が自分の中に確立されていなかつたということだと思う。今、改めて振り返ってみると、実習が始まって間もない頃は、授業をしながらも、また生徒とコミュニケーションをとりながらも“私はこの四週間で何を教えることができるのだろうか”“どういうことを教えたくて教師になりたいのだろう”ということをずっと模索し続けていたような気がする。

私の担当は中学三年生だった。教育実習先の学校は中高一貫校だったので、高校受験をする生徒はほとんどいよいよだったが、来年は高校生になるということで進路に関する講話や授業が何度も開かれていた。そこには、進路選択の大切さや大学受験の難しさなど、生徒たちの今後に関する重大な情報が詰まっていた。しかし、そのような時間には決まって、あちこちから少し気にかかる発言が聞こえてきた。「今更がんばっても、そんな良い大学に行けるわけないよ」「私なんか、がんばっても絶対無理」というようなネガティブな発言が耳に入ってきたのである。まだまだこれから努力すれば、学力なんてどこまででも上がって

いくのに、なんてことを言うのだろう。これはホームルームで何とか励ましてあげなくてはならないと強く思った。「努力すれば、必ず目標は達成できる。だから、頑張ろう」というように。しかし、いざホームルームで話すとなると、なぜか説得力のあるいい言葉が浮かんでこない。ぐずぐずと考えているうちに、もし生徒に「努力すれば必ずそれが成就する根拠はあるの？」と聞かれたら、私は自信を持つて首を縦に振ることができるのだろうか、という思いが頭をよぎり、さっきまでの高まっていた気持ちが急に萎んでしまつた。それに、そもそも「努力しても無駄だ」と思い込んでいる子どもたちに対して、どのように「努力することの大切さ」を教えてあげれば良いのだろうか。ただ漠然と「努力すれば、必ず夢が叶う」などというよくあるフレーズを言ったところで、生徒たちには何も伝わらないだろう。

どのようにして伝えるのが、最も良い方法なのだろうか……。そのようなことを考えていた矢先、私は「努力すること」の意味を考えさせてくれる教材に出会つた。それが、私が教育実習の最後に扱つた教材である重松清さんの『卒業ホームラン』という短編小説だった。指導教官の先生に好きな教材をやっていいよと言われていたので、迷わずこれに決めた。これなら、私が伝えたいことを手垢にまみれたような言葉を用いるよりはよっぽど上手く生徒に伝えられるのではないかと思ったからである。その内容は、少年野球チームの監督をしている父親の徹夫とその野球チームに所属する息子の智、思春期真っただ中の難しい時期にある姉の典子、そしてその三人を優しく包み込む母親の佳枝の家族四人。それぞれが、悩みや困難にぶつかり、立ち向かっていく中で、改めて家族の大切さを認識していくというものである。この物語の中には、典子の代名詞ともいえる印象的で興味深いセリフが何度も出てくる。「がんばつ

たって意味ないじゃん」というものだ。典子は「努力しても意味がない」と考え、この典子の考え方を徹夫は親として「それは間違っている。努力すれば必ずいいことがあるのだ」と訂正してやりたいと思っている。しかし、誰よりも努力している智がレギュラーをとれないという現実が彼の邪魔をして、「努力すれば必ずいいことがある」「努力することには意味があるんだ」となかなか断言できないでいる。この典子の言葉は私の中にもまっすぐに突き刺さってきた。努力したら必ずいいことがあるのだろうか……。私は教師として、絶対に「努力することは大切だ。努力は必ず報われる。」と言わなければならぬし、そう言ってやりたい。しかしそう思う反面、努力は本当に自分の願った形で成就するものなのだろうか、と疑ってしまう自分がいることも否定できない。努力することは確かに大切である。しかし、努力をすればそれが必ず報われるとは、自信を持って肯定することはできない。私は小・中・高と吹奏楽部に所属し、一年間ほぼ毎日練習に明け暮れていた。一日練習しなかったら、その技術を取り戻すのに二日かかると言われていたため、現役時代、楽器を吹かなかった日はほぼゼロだといつてもよい。“努力”していた。もちろん、その“努力”が、自分の理想にしていた形に結びついたことはある。しかし、自分が思うような結果にならなくて、救いようもない絶望感に襲われたことももちろんある。やはりその時は、あの努力は意味なかったのかな、無駄になってしまったのかな、と考えてしまった。私は、いいことがあるから、あるいは達成したい目標があるから、それに少しでも近付くために努力はするものだと考えていた。つまり私は徹夫と同じ考え方を持っている。だからこそ、私も徹夫もレギュラーになれる見込みがないのに、いいことがないのに努力し続ける智の姿がなかなか理解できないのである。しかし、この物語を読み進めていくと、智のいいことがなくても努力し続けられる理由が見えてくる。それは至って単純なものだが、目に見えるものばかりに囚われていると簡単に忘れてしまう「好きだ」という気持ちである。智は野球が好きだから、好きでたまらないから、たとえいい

ことがなくても努力し続けることができるのである。この言葉を聞いた徹夫は、肩がすうっと軽くなつたような気持ちになり、典子の「がんばったって意味ないじゃん」に対する自分なりの答えを見つけることができる。ここで、徹夫の心の中にあつたわだかまりが溶けたように、私の心の中のわだかまりも次第に溶けていった。

確かに、目標を達成するために、またそれに近付くために努力をするというのは大切なことだと思う。実際、私も含め世の中の人々は、皆それぞれ目標を掲げ、その目標を達成するために日々努力を続けているのだと思う。しかし、努力をする意味が目標を達成するためだけだと考えてしまうと、その目標達成の見込みがなくなった瞬間、ふつりと努力をやめてしまうことになりかねないのではないだろうか。なぜなら、目標の達成のみを見据えて追い続けていると、目標達成の見込みがなくなった時に、自分の努力し続けていた意味やそれまでに努力してきた痕跡が消失してしまうからだ。しかし、努力をする目的（意味）というのは決してそれだけには留まらないのである。智がこの物語の中で身を持って示してくれたような「好きだから努力し続ける」ということも、十分努力をする目的になり得るのである。その純粋な気持ちは、努力し続けるための原動力となって自分を支えてくれるだけでなく、目標達成の見込みが消えてしまった瞬間に現れる絶望から自分を救い出し、また新たな道を切り開いていくための大きな力にもなってくれるのだと私は思う。智の「好きだから努力する」という考え方方が正しいかどうか私にはわからない。しかし、この「何かを好きだ」という気持ちは、誰もが何かに向かって努力を始める際の原点にあるものであり、またいつでも安心して帰ることのできる温かな家のようなものであると言うことができるとと思う。つまりこの気持ちは、当たり前すぎて持っていることをすぐに忘れてしまうけれど、自信をなくした時には必ず自分を支えてくれる強い力なのである。

この物語の学習を通して、生徒がどれほど真剣に「努力する」ということに向き合ってくれたのか、はつきりとは分からぬが、彼らの真剣な眼差し

や一心に教科書を読み込む姿をみる限り、確実に何かが伝わったのだと実感した。またこの物語を通して、教授者である私も数え切れないほど多くのことを学ぶことができたし、「好きだから頑張る」という、忘れかけていた純粋な気持ちも思い出すことができた。そして何より、“自分が教師として子どもたちにどういうことを教えたいのか”という問い合わせに対する自分なりの答えを見つけることができたように思う。その自分なりの答えとは、“何かを好きだと思い、そしてそれのために努力し続けることの大切さ”である。確かに努力はしんどい。しかも先が見えなければ本当に辛くてやめたくなる。逃げ出したくなる。しかしそんな時、一度立ち止まって「好きだという気持ち」に立ち帰つてみると、意外と自分の悩んでいたことが小さく見え、もう一度頑張る力を与えてくれると思う。私も教育実習中、教師という職業の大変さを目の当たりにして、しんどいと感じることが沢山あった。しかしその忙しさの中でも、やはり生徒と接している時間や自分の大好きな国語の授業の時間は、そんな慌ただしさをも忘れさせてくれるかけがえのない、心から楽しいと思える時間だった。教師という仕事は、ただ「好きだ」という気持ちだけで乗り越えられるほど甘いものじゃないと言われるかもしれないが、やはり「好き」という気持ちがなければ成り立たない仕事だと思う。これから困難にぶつかることはたくさんあるだろうが、そんな時こそ原点である「好きだ」という気持ちを大切にして努力し続けていきたい。

【参考資料】

- ・『卒業ホームラン』重松清 東京書籍

佳 作

チェックカーコンテストに出場して

東洋史学専修三回生 島谷 貴大

私は、某スーパー・マーケットのレジ係に、アルバイトして勤めています。大学に入学して5月から働きだしたので、2年3か月働いていることになります。その店は、小さい店舗ですが、私が小さい頃からよく買い物に訪れていた地元のスーパーでした。私がなぜスーパーでアルバイトを始めたのかと言うと、レジスターに憧れを抱いており、レジを打ってみたかった、という単純な理由からでした。私は、アルバイトを始める前から、笑顔が多く、人と接するのも好きだったので、接客業をやってみたいというのもその理由の一つでした。慣れ親しんだこの町で、お客様に貢献できるような接客を、より広いスケールで言えば、社会に貢献できるような接客を目標にがんばってきました。

そういった理由でレジ係となった私ですが、私が勤めているスーパーでは、社内でチェックカーコンテストという、レジ係の接客の基礎を再度確認し、今後の接客レベルの向上を図るコンテストがあるのですが、このコンテストの予選に出場することになりました。このコンテストは毎年行われ、各店舗から数名選抜されるのですが、3年目の今年初めて選ばれました。昨年の予選出場者の話によると、予選の段階で緊張して頭が真っ白になった、とのことだったので、なるべく出場したくないと思っていたのですが、せっかくの機会を与えられ、自分の接客レベルがどれほどなものかを図れると思い、出場を決めました。予選は6月30日。

予選までに、昨年の本選のDVDを見ました。DVDを見て驚き。本選出場者のレベルの高さに。また、男子の出場者が居なかったことにも驚き。女性チェックカーしか出場していなかったのです。予選を勝ち抜くには、このレベルを目指さなくてはならないのか。更に、トレーナーという、レジ係の指導者による練習も行いました。そこで更なる驚き。今までの接客は何だったのかと言うほどの、ダメ出しの嵐。このままではだめなんだと、落ち

込んだこともありましたが、それが逆に、やってやろうという自信になりました。確かに、今までお客様に対する目線合わせが甘かったり、商品や金種の取り扱いが雑であった部分があったと思います。正直な話、今までの接客には自信があり、お客様からお褒めの言葉を頂いたこともあります。しかし、それは上辺だけの笑顔によるものだったのかもしれません。指先の動きや細かい配慮は、内面をものすごく反映します。逆を言えば、お客様に対して心がこもっていないと、雑な接客になってしまいます。作り笑顔はいくらでもできます。しかし、それが「本当の笑顔」でないということはお客様には伝わっていたのかもしれません。練習後は、お客様との距離が更に近くなったというか、接客の歓びというものを感じることができるようにになりました。この思いを胸に、チェックカーコンテストに臨もうとした私ですが、このコンテストにはまた別の思いが込められていました。

実は、私が勤める店舗は、8月31日をもって閉店することが決まっていました。小さい頃からあった店であるだけでなく、常連のお客様からも便利で好評だった店であったために、非常に残念ですが、近隣に同チェーンの大型店舗を作るという会社の方針には逆らえません。小さい店舗は次第に消えていく運命にありました。どうせチェックカーコンテストに出場するのなら、優勝して最後に一花咲かせたい。そういう思いでコンテストの予選に臨みました。

予選にエントリーした出場者は474名。全7日間を朝と昼の部に分けて、それぞれ30名ほどで予選が行われました。会場は研修センターの会議室みたいなところで、前方に一台だけレジが置かれているという、まことに不自然な状況でした。しかし、昨年度の本選のDVDを見ていた私にとっては、会場が思ったより小さかったので少し安心しました。しかし、緊張するものは緊張します。私

の出番は、30名中18番目で、早く終わって楽になりたいという思いもありましたが、前者の演技の様子を多く見られて分析もできるので良しとしました。出場者は予選にも関わらず、ハイレベルな接客をしておりました。はあ、この中で勝ち残れるのか、と不安もありながら、いよいよ私の出番がやってきました。「エントリーナンバー145番、八戸ノ里店より参りました、島谷貴大と申します。どうぞ、よろしくお願ひいたします。」予選では、お客様役が一名です。お客様の「よろしいですか」の合図で競技スタートです。90秒というタイムリミットの間に、お客様へのお声掛け、商品登録、金銭授受を行わなくてはなりません。「はい、いらっしゃいませ。お客様、当店では、4,000円以上お買い上げのお客様に、無料宅配サービスを実施いたしております。どうぞ、ご利用くださいませ。失礼いたします。198円。248円。……。お客様、当店では、20歳未満のお客様への酒類の販売は禁止されております。たいへん失礼ですが、年齢の確認できる、顔写真入りのものはお持ちでしょうか。確認させていただきます。たいへん失礼いたしました。ご協力、ありがとうございます。……。ありがとうございます。2,345円の、お買い上げでございます。日用品、別袋となっております。お忘れなきよう、お持ち帰りくださいませ。5,000円、お預かりいたします。ひとまず、1,2千円、お返しいたします。残り、655円、お返しいたします。ありがとうございます。また、お越し下さいませ。」演技は、これだけでは終わりません。お客様からの質問があります。「すいません。」「はい、いらっしゃいませ。」「切手買いたいんやけど、郵便局ってどこにあるん?」「はい、郵便局でございますね。当店出られまして、右手にまっすぐ進んでいただきますと、西友さんがございます。そちらを左に曲がっていただいて、200メートルほど進んでいただくと、左手に下小阪郵便局がございます。」「ありがとうございます。」「ありがとうございます。また、おこしくださいませ。」緊張しながらも、囁き声で大きな声で演技できただと思います。さらに審査では、お客様と目線合わせがきちんとできているか、表情が適切か、無駄な動きはないか、指先までくまなくチェックされてい

ます。自分のできる力は出せた。後は後日発表される結果を待つのみ。

結果は、見事予選通過。31名の精鋭の中に選ばれたのです。すごくうれしかったです。半分あきらめていたのですが、最後の質問の受け答えが功を奏したかもしれません。本選は7月25日。まだまだ気の抜けない日々が続きます。再び何度も昨年度のコンテストのDVDを見直し、研究分析をします。トレーナーにも練習に付き合ってもらったり、研修センターへ練習しに行ったりしました。本選では、お客様役は二名となります。その分、お客様への対応も複雑化します。私が一番困ったのは、お辞儀の角度です。お客様が一人並んでいる時は、30度のお辞儀でお迎えするのですが、二人以上並んでいる時は、15度のお辞儀で迎えなくてはなりません。また、お見送りのお辞儀は、後ろに別のお客様が並ばれていれば15度のお辞儀、後ろに誰も並ばれていない時は45度のお辞儀をします。また、お客様へのお声掛けも一人ずつに対して言わないといけないし、お客様からの質問もより難しいものとなりますし、何を聞かれるか本番まで分かりません。それを舞台の上で実技し、何百人の観客に見られるわけですから、不自然極まりません。失敗や沈黙はあってはならない。一挙一動の勝負が始まります。

7月25日。チェックコンテスト本選当日です。朝6時30分から研修センターにて一時間ほど朝練。朝8時から大会がスタート。観客も朝早くから大変です。社長を始め、役員のお偉いさんや新入社員、応援の方々が何百とある席を埋め尽くして満員状態。出場者も観客席にて自分の出番まで待機しておくのですが、周りを見てびっくり。31人の内、男性はたった二人。しかもほとんどが正社員やパートさんで、アルバイトはほぼいないという状況にあり、この中に私が選ばれたことに誇りを感じたとともに、私は場違いなのではないかという気持ちも同時に現れました。まあ、でもここまで来たからには、やるしかない。私のエントリーナンバーは24番。だいぶん後ろの方なので、前の方の演技を見る能够なけれども、長時間手汗を握りながら、緊張と空腹とに闘っていかな

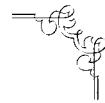
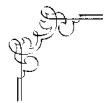
ければなりませんでした。私は普段朝はおにぎりを二つ食べるのですが、学校に着く頃にはもうお腹が空いてしまうので、多めにとおにぎりを四つ食べて臨んだのですが、そのせいか、緊張も重なり、前の方の演技を見ているとお腹が痛くなってしまった。幸い、合間に休憩があったので、何とか助かりました。しかし、出すと今度は空いてくるものです。まあ、緊張でそれどころではなくなっていましたが。

いよいよ私の出番。名前を呼ばれ、舞台から客席の方を向くと、あまりの観客の多さに驚きました。舞台に立つのなんて、高校の吹奏楽の演奏会ぶりでした。ましてや、一人で舞台に立つのなんて生まれて初めてでした。無事に終えることを願って深々と礼。「エントリーナンバー 24 番、八戸ノ里店より参りました、島谷貴大と申します。どうぞ、よろしくお願ひいたします。」「よろしいですか。」「はい、いらっしゃいませ。こんにちは。お客様、当店では、4,000 円以上お買い上げのお客様に、無料宅配サービスを実施いたしております。どうぞ、ご利用くださいませ。失礼いたします。……。」一人目のお客様は何とか無事終了。「お待たせいたしました、いらっしゃいませ。」そこに、一人目のお客様から質問があります。「すいません。」「はい、いらっしゃいませ。」「このクーポン券って、どのお店でも使えるの。」「はい、クーポン券でございますね。はい、全店でご利用いただけます。えー、ただし、一部お取り扱いしていない店舗、えー、商品もございますので、えー、詳しくは係員にお尋ねくださいませ。」「ありがとうございます。」「ありがとうございます。」言葉が全く出てこない。あー、だめだと思いました。しかし、やり直しはできません。続行しなければ。「お待たせいたしました。……。」二人目のお客様へのお声掛けは、「お客様、いつもご来店ありがとうございます。当店は、誠に勝手ながら、8 月 31 日をもって閉店とさせていただきます。なお、当店閉店後は、近隣の中小阪店、御厨店をどうぞ、ご愛顧くださいませ。」としました。すると、客席が大きな笑いに包まれました。これは、お声掛けをユニークなものにしたいと思い、アドリブで言ったものです。しかし、私としては、演技

の方には納得がいってませんでした。一位は無理だなと思いつつ、自分の席に戻りました。

いよいよ結果発表。10 位から順に発表されていきましたが、私の名前はなかなか出てこず、もしかしてランクインしていない?まあ、男子やし、噛み噛みやったからなあと、半ばあきらめてしまいました。結果は何と、第一位!信じられませんでした。というか、アルバイトごときが一位なんて取ってしまっていいのか、というのが本心でした。また、店も閉まるから最後の同情票か、なんて思ったりもしました。男子が、ましてやアルバイトが優勝したのは、初めてだったそうです。表彰式後、私の勝因は何だったのか、お世話になったトレーナーに聞いてみると、笑顔がとにかく良かったそうです。緊張していたはずなのに、「本当の笑顔」が作れていたことに自分でも驚きです。緊張しつつも、その場を楽しんでいたのかもしれません。

一位をとれたことは、私にとって大きな自信へとつながりました。そして、あと一ヶ月ですが、お世話になった店舗やお客様への感謝の気持ちをもって接客していくようになりました。チャッカーコンテストという、なかなか味わえない体験をさせていただけたことによって、私の人生の刺激にもなりましたし、この経験はこれから社会に出ても大いに役立つものとなるでしょう。



第7回 文窓賞 学生レポートコンクール 入賞作品

最優秀賞

該当者なし

優秀賞

「過去を振り返って、そして大学生活への抱負」

伊石 昂平 (人文学科1回生)

「東南アジア、汗まみれ」

酒井 友樹 (国文学専修3回生)

佳作

「私の教育実習」

河内 茉奈 (英米文学専修4回生)

「教育実習を終えて」

斉賀 万智 (国文学専修4回生)

「チェックカーコンテストに出場して」

島谷 貴大 (東洋史学専修3回生)

◎ 選考会 2013年8月30日

◎ 選考委員

藤井 勝学部長 (社会学教授)

長野順子副学部長 (芸術学教授)

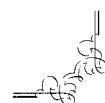
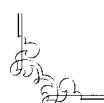
奥村 弘副学部長 (日本史学教授)

池上 淑子 鞍井 修一 日高 健一

花木 直彦 廣野 幸夫 西川 京子

武藤美也子 吉田 浩次 宮崎 典久

田中 賢司 坂本 直樹



発行

2013年10月26日

神戸大学文学部同窓会

文窓会

<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/> (文窓会)

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/> (神戸大学文学部)